

●奨励賞〔論文概要紹介〕

家庭と学校の連携をめざして発行した道徳通信の効果の検証

栃木県足利市立南小学校 うちだひとし
内田仁志

【実践の概要】

新学習指導要領には道徳教育改善のための三つの基本方針が示されている。その一つに挙げられている「家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育の充実」は、これからの道徳教育において極めて重要な視点であると判断する。なぜなら、道徳教育は、児童生徒の日常生活のすべての機会や場面で行われるものであり、学校、家庭、地域がそれぞれの役割を果たし、一貫した方針のもとに進められなければならないからである。そのような要請のもと、学校においては道徳教育の取り組みを家庭に伝える手段が必要となる。道徳通信は学校教育と過程との架け橋として、極めて有効な手段である。本論文は道徳通信の実践を紹介し、どのような成果があったかを検証したものである。

【論文内容の紹介】

1 研究の意義

道徳通信を発行することによる意義を次の2点にわたって述べる。

① 家庭における道徳教育の啓発

道徳教育は児童の日常生活の全ての場面で行われるものであり、学校だけの指導では不十分である。学校で指導している基本的な生活習慣、しつけ、人間関係、信頼関係など、日常生活を円滑に進めるための資質は学校でも指導してい

るが、やはりそれらの資質を養う第一歩は家庭である。学校から家庭教育の重要性を伝え、家庭でも道徳的实践力を育て、高める一助にしたい。

② 家庭への情報提供

学校では道徳教育についてどのようにとらえているのか、どのような授業をしているのか、道徳的価値の中でも何を重点的に指導しているのか、等を家庭に伝えることは家庭の道徳的实践力を高めるためにも重要なことと考える。また学校の取り組みを伝えることにより、家庭に学校で取り組んでいる道徳教育について理解を深め、協力を求めることが期待できる。そのような学校の取り組みを伝えるためにも道徳通信は有効な手段になると考える。

2 道徳通信の効果

道徳通信により学校の道徳教育の様子を伝えることで次の効果がある。

- ・学校の伝えたい情報を必ず伝えられること
- ・定期的に児童の様子が伝えられること
- ・保護者からの意見も吸い上げられるようになること

3 道徳通信の実践

実際に下記の内容の道徳通信を発行した。

(1) 本校の道徳の概要を伝える通信

① 記事のポイント

- ・研究校になったことを知らせる。
- ・本校が目指す児童の姿を伝える。
- ・道徳の時間で何を習うのかを明確にした。

② 成果

- ・研究の概要が明確になった。
- ・現在の道徳の指導事項が明確になった。

(2) 道徳研究授業の実践を伝える通信

① 記事のポイント

- ・授業の紹介、ねらいを明確にした。
- ・保護者参加の紙面にした。

② 成果

- ・授業の記録として残る。

・ 道德の授業の流れが保護者に理解できる。

(3) 保護者に「わたしたちの道德」の依頼をした通信

① 記事のポイント

- ・ 「わたしたちの道德」を特集した。
- ・ 「わたしたちの道德」で家庭で書くページを明確に示した。

② 成果

- ・ 学校の指導の共通理解が図れる
- ・ 家庭の役割が明確になる。

4 研究の成果

成果について次の3点を論じる。

(1) 教員の道德に関する意識の変化

次の2点で教職員の道德教育に対する変容が見られた。

① 全校で統一した道德過程が可能になった

② 「心のノート」「わたしたちの道德」の全校同時での活用が図られた

(2) 家庭での変化

過去3年間で「学校は家庭に情報を開示しているか」という調査を試みた。道德通信を発行した過去2年間ではその前の年の調査と比較し、情報開示を「している」「よくしている」と項目で10%以上の向上が見られた。

③ 児童の変容

特にあいさつ、言葉遣いについては顕著な効果が見られた。ほかには金銭感覚などの指導を道德通信により取り上げ、お金や高価なゲーム等の貸し借りがなくなり指導に役立ったという報告を得ている。

以上、道德通信の成果を挙げ本稿の結びとする。

●奨励賞【論文概要紹介】

図、表をかき、説明し、話し合う児童の育成

秋田県横手市立醍醐小学校 さとうかずひさ 佐藤一寿

【実践の概要】

本研究は、2012年から昨年度にかけて前任校（横手市立増田小学校）で少人数学習担当として6年生の算数の授業を担当した実践記録である。解き方を分かりやすく教えて練習し定着させる指導、教師主導の授業から脱却し、児童自らが図、表等をかき、説明し、話し合う授業、問題解決型の授業を目指したいと考えた。数学的な考え方を育てるには解法を習うだけでなく、自ら解法を生み出す経験が必要である。よい解法を見ても、真似だけでは、問題解決能力、活用力は育ちにくいし、主体的にかかわらないと自分のものとはならない。学習問題（問題文）を提示したときに、式、答えを書くだけの児童にどのような手立てを講じればよいのか、その手立てと有効性を探った。

【論文内容の紹介】

1 主題に迫る手立て

① 「図、表等にかく」

- ・ 教師や友達がかいた図、表、グラフ、式等をノートに写す。
- ・ 問題の数値を変えた類似問題を自分で解き、図、表等に表す。
- ・ 宿題、自学でも、類似問題を自分で解き、図、表等に表す。

② 「解法を説明する」

- ・教師や友達の説明を復唱する。(区切って)
- ・友達の説明を復唱する。(一気に)
- ・友達の考えを自分の言葉で説明する。(ペア、グループ等)
- ・自分の解法を発表し、説明を書く。
- ・自分の解法だけでなく、友達の解法も説明する。
- ・図表、グラフ、式等に表現されている数値の意味を説明する。(言語化)

③ 「複数の方法で解く」

- ・1つの解法で解けたなら、その解法の説明を詳しくかくのではなく、別の方法に取り組ませる。
- ・本時の問題に類似したふりかえり問題を解き、その解法を選んだ理由を書く。

④ 「解法について話し合う」

- ・解法を比較・検討し、どの解法が簡潔・明瞭・的確かを話し合う。
- ・どんな場合にその解法が有効かについて話し合う。

2 実践の成果

【書く】【説明する】言語活動を取り入れることで、児童の思考力、表現力高めることができた。自分の考えをかき、説明できる児童が増えた。

【話し合う】言語活動を取り入れることで、上位層の児童の判断力を高めることができた。解法を比較・検討することで、簡潔・明瞭・的確な方法に気付き、それを利用してふりかえり問題を解くことができた。その問題文の数値等に合わせた的確な解法を考えるようになった。

上位層には有効だった、話し合う言語活動、解法を比較・検討する話し合い活動を取り入れても、中位層から下位層にかけての児童の思考力・判断力を伸ばすことが難しかった。その原因として、下位層の児童は友達の話を聞いてもその内容を理解するのに時間がかかるからである。その集団に合った言語活動、指導法を開発していくことがこれからの課題である。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

英語を学ぶ本当の意味とは

なか がきく に よ
奈良女子大学附属小学校 中垣州代

【実践の概要】

「英語を学ぶ本当の意味」は、英語を使って自分が言いたいことを伝えたり、聞きたいことを聞いたりしてコミュニケーションをとることで、多くの人と関わることの楽しさを知ることにあると考えている。それを子ども自身が感じられるよう、小学校英語において意欲向上を大事にしたい。本校では、大正時代から「奈良の学習法」による主体的な学習を行っている。その「奈良の学習法」を取り入れた国際（本校では、外国語活動とは言わず、国際と呼んでいる）のカリキュラム、学習内容をつくってきた。

実践から見えてきたものは、子どもの思いを実現する学習づくりの大切さである。

【実践内容の紹介】

1 「奈良の学習法」を取り入れた国際

「奈良の学習法」は、まず自分でじっくりと考え、学習問題に向き合う「独自学習」があり、次にクラスの仲間で学びを共有し深めていく「相互学習」がある。そして、「相互学習」で学んだことを自分の中に取り入れて再び学習問題に向き合う「独自学習」がある。

国際の学習における「独自学習」とは、自分の伝えたい気持ちを英語で表現することであると考えた。和英辞典で調べたり、教師にきいたりして、自分の伝えたいことを英語で言えるよ

うに練習を行う。「相互学習」は、コミュニケーション活動を通して学び合うことである。独自学習で、それぞれが学習したことを出し合い、友達が伝えたいことを知り、更に自分の学習の中に取り入れていこうとする態度を育てていく。その学びをしっかりとふりかえることが更なる「独自学習」につながっていくと考えた。

まず、アンケートをとり、本校の「国際」における課題を分析し、手立てを考えた。そして、子ども自身が「できるようになりたい」と答えた「自己紹介を詳しくできる」ことを目標とした、CAN-DOリストを作成した。

2 学習の実際

本校では、係が英語で学習を進められるように指導を行っている。学習の最初2分間は、友達との会話タイムを毎時間繰り返している。

【独自学習】 独自学習では、テーマにそった基本文を学習し、その基本文に合わせて自分が伝えたい自己紹介となるように、文を考える。

【生活と英語学習との接続】 単元の2次は、独自から相互学習への移行時間としている。発表者が、聞いている友達と会話形式で発表をする。ICT機器を使用し、コミュニケーションの楽しさを感じながら、同じ言葉を繰り返すことで定着を図っている。

【相互学習】 「相互学習」のコミュニケーション活動では、新しい文のみの活用ではなく、既習内容を含め会話を膨らませる活動を意識させている。また、簡単な「Me, too」「Really?」などを取り入れナチュラルな会話ができるようにしている。

【めあてとふりかえり】 毎時間、ワークシートを使用し、めあてとふりかえりを丁寧に書く指導も行っている。

【外国の人との交流】 この「詳しく自己紹介をしよう」の単元の最終段階として、外国人と実際に話す機会を設けた。

3 研究結果

「英語は好きですか」の問いに対するアンケート結果である。

5 年		
	4 月実施	7 月実施
はい 5	31.1%	45.2%
4	21.6%	30.1%
3	37.8%	13.7%
2	5.4%	4.1%
いいえ 1	4.1%	6.8%

4 実践からの考察

「詳しく自己紹介をしよう」を通して、英語を好きだと思える子どもが増えた。それは、担任として子どもを励まし、丁寧に意欲付けを行えたことも影響していると考ええる。

5 英語を学ぶ本当の意味とは

子どもの立場に立って学習を作っていくことで、子どもは「英語を学ぶ本当の意味」を知るのではないだろうか。

●奨励賞【論文概要紹介】

産業学習における自分の生活をより実感できる教材の開発について

ながの たかゆき
埼玉県川越市立大東東小学校 永野貴之

【実践の概要】

これまでの実践を振り返り、社会科の授業は

子ども目線で考えていく教材開発や問題解決的な学習の工夫がさらに必要だと考えた。そこで本実践では、私たちの生活に欠かすことができない「トイレ製品（小学5年）」を教材化した。子どもたちにとって身近な機械製品であるトイレを、トイレ製品づくりに携わる具体的な人々の登場を通して、工夫や努力、持続可能などについて調べ考えさせ、普段何気なく見ている社会的事象と自分の生活の結び付きに気付けるよう実践を試みた。

【論文内容の紹介】

1 トイレ製品を教材化した理由

①トイレは、子どもたちの生活に直接関わる身近な機械製品であること。

トイレは、子どもたちの生活に直接関わる身近な機械製品である。実践では、子どもたちが1日に何回トイレに行くのかを調査しことを表にして取り上げた。また、これまでのトイレ製品の変遷を年表にまとめ、温水洗浄便座が開発されたことなどを読み取らせた。

②具体的な人物の働きを通して理解できること。

教材研究を進めていく中で、トイレ製品づくりに携わる方や研究者、ショールーム等で製品を販売している方から直接話を聞くことができた。実践ではそういった人たちの声を自作の資料にして働く人々の工夫や努力を調べ、思いや願いを考えさせた。また、販売に関わる方をゲストティーチャーに招くとともに実物のトイレを教室に持ち込み、実物のトイレに触るなど体験的な学習を実施した。

③持続可能な社会につながる環境保全（水）の取組についてとらえやすいこと。

トイレ企業の最大の課題はいかに少ない水で汚物を流すかであり、また私たち消費者も大切な資源である水を無駄使いしてはいけない。これからは「持続可能」を外してものごとを考えていくことはできないからである。

2 実践のまとめ

実践を通して、分かったことがあった。一つめは、「トイレは普段何も考えずに使っていたモノ」から「未来の環境まで考えて、様々な人たちが工夫や努力をしてつくっているモノ」という見方に変容させることができたことだ。トイレ製品は多くの人たちの様々な工夫や努力があってつくられていることを理解し、多くの人たちの思いや願いに気付くことができた。これは、具体的な人物をできる限り授業の中で登場させたことや写真や実物資料を活用し、トイレ製品づくりを具体化できたからだと考える。

二つめは、学習を通して子どもたちが社会を支える人々の存在や身近にあるものの価値に気付けたことだ。子どもたちの学習感想に、「これからはトイレをもっときれいに使いたい」といったような感想が数多くみられたが、あるものごとに対してありがたいと思う気持ちをもてるようになったことは社会的事象がより自分に近くなったと感ずることができたからではないだろうか。

子どもたちは、普段何気なく見ている社会的事象が自分の生活と直接関わっている意識はそう高くはない。身近なものや意外な事実との出会いを教師側が提示していくことで、子どもたちは身近な社会的事象に目を向け、向き合うことができるのではないだろうか。教材研究の大切さや身近な素材を加工し工夫することで、子どもたちの主体的な学びを生み出し、有効性を確認することができることを勉強させてもらった。